

二十一世紀こそ正義の世紀に

ウラジエンドラ・R・メータ

石神 豊 訳

本日、東洋哲学研究所から、ここ創価大学において「東洋哲学学術賞」を授与していただき、私にとりましてたいへんな名譽と恩恵であります。この学術賞をお受けしますことは大きな喜びですが、同時に大きな責任も感じるしだいです。

私は、去る一九九七年に「創価大学最高榮譽賞」をいただき、たいへん感動いたしました。あらためてこの場で、創価大学学長および関係者の皆様に感謝申し上げます。今日ここで、私にさらなる榮譽が与えられたことに、喜びと感謝を申し上げる言葉もないほどです。創価

大学とデリー大学は、教育交流についての協定を結びました。これはたんなる協定というより、平和・文化・教育を促進することで、真理に関わろうとする両大学の新しいパートナーシップの開始です。私たちはこの新しい関係から生まれる成果を信じてやみません。ともにこのことをお祝いしたいと思います。

創価大学は偉大なる創立者である池田創価学会名誉会長のもと、大いに發展され、日本における最高の教育機関の一つとしての声望を確固たるものとされました。池田名誉会長は、英知そして非暴力と平和の探求におい

て、数多くの業績をつくってこられました。人類の幸福のために、哲学、人格、行動を一身に集められ、学問に携わる者にとって完璧な模範を示されています。

道徳的な社会秩序が必要

私たちは冷戦後の世界に住んでいます。数年前までは、冷戦が終結した結果として、新しい平和な時代がやってくるようにも思われました。たしかに世界全体に民主主義的な力が蘇り、その結果、これまでにないほどの人権意識が高まりました。しかし残念なことに、人類を分断するところの民族性、宗教、その他の名目をもって、時を同じくして争いが発生してきたのです。ここには、その原因がわからず、解決のしかたもまったく不明な、深い危機感が存在します。

冷戦期にあつては、アメリカ合衆国とソビエト連邦の間には、力の均衡が存在しました。この力の均衡は、双方の側に抑止力として働いたのです。しかし、冷戦の終結によってアメリカ合衆国が唯一の強大国として浮上した結果、ここに、悪しき傾向を押さえるべき諸機関をは

たして世界がもっているかどうか、まったく心許ない状況となってきました。さらに、アメリカ合衆国自体、国内の諸問題を抱えています。ルインスキー事件は、大統領の道徳的權威をかなり損ないましたし、したがって他の国々を統制するアメリカの權威も損なわれてしまいました。

争いは国際社会だけでなく諸国家の内部にもあります。たとえば東欧諸国家はたいへんな国内紛争を抱えています。諸国家は階級制度、宗教、言語あるいは民族性というような諸問題を克服しようと苦悶しています。しかしアメリカ合衆国も、効果的に介入する力をなくしてしまつたようにみえます。そして、最近の事件、とりわけイラクにおける事件は、騒ぎを起こしたアメリカに対し、国連の安全保障理事会がいかに無力であるかを示しています。

こうした状態はどのようにして生じたのでしょうか。また、その原因はなんでしょうか。これは、世界中の思慮ある人たちを悩ませる二つの問いだといえます。これらの問いに単純な答えはありません。しかしその原因

の一つは、それは池田名誉会長も同意されているのですが、人間性の中核にある深い道徳的、心理的危機です。私たちはあらゆる物質的な快適さをえたように思っています。しかし未来を形成するヴィジョン、方向、意志を欠いています。人間の相互関係の網は、ますます傲慢さ、憎しみ、利己主義によって性格付けられつつあり、そこでは人間性の感覚が失われつつあります。今やその場所は最悪のアトミズム（原子論）（訳注 個々がバラバラとなった状態）によって占領されています。このアトミズムは道徳秩序の崩壊の中でもたらされ、そこでは正邪の区別が役に立たないのです。家族の崩壊、教会の衰亡、教育と情報の混同、そして政治的闘争の勃発などは、そうしたいくつもの実例といえます。国内政策の編成上の失敗と、不均等な社会での競争の敗北がシニズム（冷笑主義）を台頭させることになりました。

創価学会初代会長の牧口常三郎氏もまた、現代と同様な権威主義的教育、価値の混乱、民衆における方向性の欠如、そして家庭や社会の全面的な崩壊に直面しました。明治以来、日本政府はフランスやアメリカやドイツ

の教育を模範として種々試みてきたのですが、教育システムを創造力、獨創性、そして希望が欠けたままに放置していました。牧口氏はこうした社会の改善に立ち上がり、価値を基本とした教育を導入したのです。しかし人々は、そのときはまだ差し迫ったものとして理解できなかったのです。だが今日、池田名誉会長は、牧口氏の平等主義、価値を基礎とした教育システムのヴィジョンを、この創価大学において実現されています。池田名誉会長こそ、今日、人類の偉大な希望なのです。

ガンジーは二十世紀における偉大な指導者の一人ですが、彼は『ヒンドゥ・スワラジ（インドの自治）』という小冊子の中で、西洋文明の不道徳な側面に非を唱えました。早くも一九二一年に、彼はソビエト・ロシアにおける共産主義の失墜を予言していますが、それは、暴力による文明は永続しないという彼の確信によるものでした。彼は非暴力、献身的行為、そして真理に基づく新しい人間的な文明を思い描きました。これはガンジー、牧口氏、そして池田名誉会長のような偉大な人物に共通する考えかたです。

今日、先進諸国において、貧困や諸資源の不均等な配

分という問題があります。そこでは欲望の満足に際限がないようにみえます。人間は際限なく進行する魂なき機械の奴隷と化してしまいました。これは深い危機意識をもたらします。ここには経済的・政治的な原因があるともいえましょう。政治的には、植民地主義ないしは新植民地主義という、歴史的に受け継いだ負の遺産があり、これこそ世界の三分の二以上の人々を貧しくさせたものなのです。

しかし、それ以上に、ここには「精神」の貧困があります。じつに「精神」こそ、人類を他の動物と区別するものです。ここで私は、この「精神」という言葉を、神秘的意味合いにおいて用いてはけません。私にとってこの言葉こそ、人間を真理、幸福、そして美へと駆り立てるところの典型的な言葉なのです。これに対し、現代の社会・政治的關係を性格付けているようにみえる権力や党派性という誘惑物は、私たちを脅かして、自我を探索することを妨げているのです。

それゆえ、私たちがなすべき真の挑戦とは、人間精神

を豊かにする道徳的な秩序をいかにして創造するかということです。平和と繁栄はこの創造のためには必要なものです。しかし同時に、人間の精神を豊かなものにする音楽、美術、文学などの必要も強調しておくべきでしょう。これらは、人間に、新しいそしてより創造的な文明を求めて、この世俗的な世界を克服させていく力を与えるものです。

魂の探求の重要性

古代インドの賢者たちは、あるパラドックスを予見し、こう言っています。

「個人は村のために、村は州のために、そして州は国のために犠牲となる必要がある。」

しかしながら、さらに次のように彼らはつづけます。

「魂のためには全世界がなげうたれてもよい。」

この理念はインドの文明を古来支えつづけてきたものです。仏教とジャイナ教は、この理念をもっとも精妙に、もっとも深く表現しました。この理念は、近くは、偉大な人間性を具えた詩人タゴールによって繰り返され

ています。彼はこう述べています。「私たちは一人で歩もう」と。

ブッダは人間の道徳的なありかたを求めて、この方向へと真に偉大な歩みを進めたのです。非暴力、節制、受苦、献身、質素、中庸そして真理という、インドが古来、強調してきた美徳は、おそらく諸文明の根底にもあるものです。そこに相違があるとすれば、それは、神による事物の配剤の順序だけです。信仰が一種の支えであり癒す力であるように、もし神を信じることができればすべてはうまくいくでしょう。しかし、神を信じない場合でも、こうした美徳が、人間の生活を維持・促進し、発展させていくために必要であるという自覚さえあれば、心配はないのです。この道徳的なありかたは、より大きな善と社会の利害に自分の身を捧げるか否かにかかっています。おのれ自身の利害を乗り越え、他者のために生きてこそ、栄光に達するのです。

富裕でありすぎること、あまりにも貧しすぎることは、社会の健全さに反しています。すべてのものは神に属している、という感情に裏打ちされた中庸の生活こそ

り出されましたが、ここでは、個人は国家という祭壇へ犠牲として捧げられたのです。そして「現実意志」、「神」、「歴史」、「人種」などのいずれかが、そうする理由としてあげられました。

この世界を個性・独自性・分離されたものとして理解する人々がいますが、集団性・官僚主義化・国家統制すべきものとして理解する人々もいます。こうした個人主義、集団主義という二つの傾向の不幸な結果として、「自我」の喪失が起こったと私はここで言いたいのです。そして、現代科学が権力を持つ人間の手中に握られ、危機はより深刻なものになってきたのです。

現代インドの思想家であるオーロピンド（訳注 ベンガル分割に反対し、英国官憲の迫害を受けた宗教思想家）、クマラスワミー（訳注 インド文化復興運動の中心となった美術史家）、そしてガンジーは、「ダルマ（法）」という古代からの伝統へと復帰することで、上に述べた二元論的な見解に対する解答を与えました。

ダルマは、事物を相互関係という観点からみて、究極の超越——「ニルヴァーナ（涅槃）」——という理想を

理想といえます。これは、全世界はゴーパーラ（訳注 ヒンドゥー神話の牧牛者で、クリシュナの化身とされる神）に属しているのだから、「私のもの、あなたのもの」といつて、互いに争う資格は人間にはないのだ、と述べたガンジーの言葉が意味するものです。

牧口氏、そして創価学会第二代会長の戸田城聖氏はともに教育者であり、教育の現状を憂い、打開する方法を求めました。その方法とは、人々や生徒を、より大きな幸せへ、社会で活躍する人間へと導くものでした。お二人は、人が他の人々のために働くことによって幸福を見いだすような世界のありかたを熱望されたのです。

個人と共同体の関係について

伝統的な西洋的思考は、近代において、個人主義と集団主義の間を揺れ動いてきました。一方で、社会を顧みない個人を過度に強調することで資本主義が導かれたのですが、その結果、生活上の物質的富を左右する人々が、この世界を支配するようになりました。また他方、集団性を過度に強調することで全体主義という体制が作

求めます。この世界は多極的なものとして把握されます。ちょうどそれは、場の理論が、ある面にさまざまな点を認めるようなものです。この多極性という基礎の上に、複雑でカラフルな人間関係というタペストリーが織られます。そして、人間の必要物と欲望の間、社会的諸関係と制度的な配置との間に、絶妙なバランスが創りあげられます。こうした構図の中では、もはや国家は、民衆を豊かにさせる以上の役割はもたせません。

リベラルな思想家であるマッキンタイア教授（訳注 西洋近代の自由主義的個人主義に代わって徳の伝統を重視するアメリカの現代倫理学者）は、アリストテレスの徳（virtue）の考えに立ち返るべきだと主張しています。同じく、カナダの哲学者チャールズ・テイラー（訳注 近代個人主義の一面性を批判し、共同体の意義を強調した現代哲学者）の超越（transcendence）という概念は、私たちの自我の探求における統合的な考えをほのめかすものだといえます。戸田氏もまた、個人は社会の中で価値を創造する必要があるということを強調されました。牧口氏も、子どもの成長においては、家庭・学校・社会という三者

の間の関係が大切であるという見解をもっていました。その結果、子どもが大きくなってから、社会に何らかのものを還元するという義務の感覚をもつことになるわけです。

インド的な見方によれば、社会は全体のなかでの多くの全体から成り立ち、個人から出発して宇宙へと達するところのものです。それぞれの全体は、自身の本質的要素 (prakriti 本性) と性質 (svabhava 自性) によって自己自身との同一性をもっていますし、また大きな全体の部分でもあります。多くの全体の理想的な関連のしかたは、全体論的体系 (ホーリスティック・システム) において考えられることとなります。この体系においては、すべての全体は、統合された認識、統合された特質、そして統合された活動として共存するのです。これらは、インドのあらゆる宗教的伝統の根底にある三つの重要な原理です。

人間と自然、人間と人間、そして人間と宇宙との間には、宇宙的プロセスにおける有機的連関があります。この有機的連関とは、全体に対する部分の関係ではなく、

目的とともに自己同一性をもったすべての全体の間の関係です。この考え方は、古代ギリシャのプラトンやアリストテレスの考え方や、中国の宋時代の朱子学ときわめて近いものです。

こうしたすべての諸関係を導く原理は、永遠との結びつきを求める、無限の可能性をもった人間の卓越したありかたに由来します。深く分析していくならば、自我の探求こそが、善と悪、正義と不正の区別を可能にするのです。すべての人為的制度は、人間自身が豊かになり、その潜在的な可能性を自覚するために、そのよい条件をつくるためにあるのです。諸制度はこの目的を促進するかぎりにおいてのみ、その正当性をもつのです。

人権への現代の関心もまた、個人の卓越した位置を認識することから生じます。古い秩序が消えていくような社会では、皆が人権に関心をもつことが、もつとも基本的な人間の価値を守るための最後のよりどころなのです。人権が維持されず、守られない社会は原始的な社会だといえます。

しかし、ある意味で、西洋で感じとられているような

人権という観念は、二つの限界をもっています。まず第一に、それは事物を分離し、ときに矛盾したものとしてみえています。その結果、人為的な障害をつくり出しています。第二に、それは人間のありかたを、「個人 (individual)」とは異なるところの「自我 (ego)」として十分に認識していません。つまり、西洋的な人権の考え方は、人間と宇宙的進行——いわゆるシヴァの舞踊——とを結合している、微妙な絆を正しく評価していないのです。古代インドの賢者は、分離したものの間に存在する矛盾や闘争を解決しようと努め、そこに同情 (karuna 悲) と友情 (mitra 慈) という原理による絆を見いだしたのでした。

ガンジーが教えたもの

ガンジーは偉大なヒューマニストでした。彼はあらゆる形態の政治的・経済的な権力を不信の眼で見ました。権力は、進歩の根本である人間の個性を破壊することで、人類に害を与えます。彼にとって「スワラージ」(独立) というのは、つねに、たんなる政治的・経済的

自由以上のものでした。「スワラージ」とは、道徳的な理解の根本的な変化を意味しています。彼は、独立は自己献身と自己浄化によってのみ達成されうると固く信じていたのです。ガンジーは、社会の理想的なありかたとは、「相互的な力、自由で自発的な活動」であるということを確認していました。ガンジーは、彼の考える社会のありかたを、次のように述べています。

「無数の村々からなるこの社会構造にあつては、広がりつづけるけれども、けつして突出していくような円はない。生は底辺に支えられた頂上をもつたピラミッドではない。(中略) しかしそれは広大な円であり、その中心はつねに村々のために尽くす個人であることになろう。村々はさらなる大きな円のために尽くす用意ができており、ついに全体は個々人からなる一つの生命になる。その全体は、けつして尊大で攻撃的なものではなく、むしろ慎ましやかであり、統合された単一体であるところの広大な円の威厳を個々人に分けあたえる。」

彼はさらに述べています。

「もつとも外側の円周は、円の内部をつぶすための権力を行使しないだろう。むしろ内部のすべてに力を与え、すべてからそれ自身の力を引き出させるだろう。」

このガンジーの考えは、社会生活を広大な生ける円と考えることによって、あらゆる見せかけの矛盾を乗り越えようとする展望を示しています。オーロピンドはそれを「複合的、相互的な自由」として描きました。

新しい経済秩序と二十一世紀

私たちは現在、世界のグローバル化（地球的規模化）と市場化という局面を経験しています。ここからは巨大なエネルギーが世界中に放出されています。どこかの国の青年を見るならば、彼らのなかにたいへん大きな自信と、なにかを自分の生涯においてなしたいという切望とを見いだすことでしょう。たとえばインドでは、以前の世代の人々は、質素であることの美徳をほめたたえたのですが、新しい世代の人々は、富むための経済的發展に価値を与えています。むしろ、学問の女神（サラスワテ

イー・弁才天）と富裕の女神（ラクシュミー・吉祥天）の間に分離はありません。というのは、両者は一つの輝ける神性（シュリー・吉祥）の両側面だからです。

市場経済と、貧しい者や弱者の福祉への関心とを結びつける必要があります。この関心、それは古代インドの政治の根底にあったものです。カウティリヤ（訳注 紀元前三、四世紀の人物でマウリア朝成立に力を尽くした政治理論家）は、王子たちに、「貧者と弱者の涙を怖れよ、それは王国のもつとも力強いものを破壊しうるからである」と忠告しました。私たちは吉祥天（繁栄、富裕）を崇めますが、同時に、すべての人々に適切な教育、健全な施設、そしてより清潔な環境を供給することで、すべての人々に機会の平等を確保する必要があります。市場経済の典型と見られているアメリカ合衆国においてさえ、資本主義があらゆる圧力に耐えることができるようになったのは、少なくとも理論上では、主としてその資本主義が人間的な顔を獲得したかにも見えるからです。

新しい経済秩序は、上に概略述べました全体論的な観点を導入しなければなりません。ジョン・ロールズ教授

かぎりです。

（訳注 正義論などで著名な現代アメリカの政治哲学者）は政治理論において、そしてセン博士（訳注 アジアで初のノーベル経済学賞の受賞者）は経済学において、貧しい人々と恵まれない人々の問題を中心課題としてとりあげました。新しい世代のスローガンは、「私的生産と社会的使用」であるべきです。これは世界でもっとも偉大な人間愛の原理である、アリストテレスの徳やマヌの「upkar 饒益」（他者に利益を与えること）と一致します。さらにこれは、牧口氏の「創価」つまり「価値創造」の理念とも一致します。

ガンジーはこのヴィジョンを要約し、すべての政策立案者に核心的なヒントを与えました。「あなたの方が政策の立案で迷ったときには、いつでも貧しい人の顔を思い浮かべなさい、そしてその政策が貧しい人にどんな影響を与えるかをよく考えなさい。よい政策とは、弱者を強くし、強者を正義へともたらしめるものです」と彼は述べたのです。

池田名誉会長は、卓越したしかたで、これまで述べてきた理念をはっきりと示されており、まことに喜ばしい

私たちは今や新しい第三の千年に入ろうとしています。問題は、私たちが二十一世紀へと勇躍するためにぜひとも必要な、この理念あるいは方向を、もつことができるか否かということにあります。十九世紀は自由の世紀でした。二十世紀は平等の世紀でした。そして二十一世紀は正義の世紀となるでめりましょう。それは、新しい自己認識、自覚、自制をもつところの、道徳的そして社会的な秩序の世紀です。ここでは、すべては平和、愛、そして友情の精神によって、ともに結びつくのです。ゴータマ・ブッダ、日蓮大聖人、マハトマ・ガンジー、そして池田大作氏に共通しているものは、この人間的な観点です。

最後に、私のスピーチを、つぎのウパニシャッドの詩句で結びたいと思います。

「空想から現実へ

闇から光へ

無常から永遠へ

われらは歩みゆかん」

(ヴラジェンドラ・R・メータ／デリー大学副総長)

(訳・いしがみ ゆたか／創価大学教授)

(本稿は一九九九年一月六日、創価大学において当研究所がメータ氏に「東洋哲学学術賞」を授与した際の、氏の講演原稿です。なお、読者の便宜のため文中に適宜、訳注をほどこしました。)